

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	甲	第	号
------	---	---	---	---

氏 名 富田 稔

論 文 題 目


Clinicopathological features of neuropathy associated with lymphoma

(リンパ腫に関連したニューロパチーの臨床病理学的特徴)


論文審査担当者

主 査

名古屋大学教授

委 員 中村 栄 男 

名古屋大学教授

委 員 伴 信太郎 

名古屋大学教授

委 員 安藤 雄一 

名古屋大学教授

指 導 教 授 相 次 江 元 

## 論文審査の結果の要旨

本研究では病的にリンパ腫と診断され、ニューロパチーを有する 32 例で臨床病理の特徴を明らかにした。リンパ腫に関連したニューロパチーの病型は多様だが、その主体はリンパ腫の直接浸潤による neurolymphomatosis であり、傍腫瘍性ニューロパチーは少数であった。神経症候は多くの例で focal な多発単神経炎型を呈し、直接浸潤例の 80% に自発痛を認めた。FDG-PET が診断に有用であり、末梢神経伝導検査では軸索変性所見に加え脱髄所見を認め、慢性炎症性脱髄性多発根ニューロパチー (CIDP) の電気生理診断基準を満たす例が多くを占めた。直接浸潤例の病理所見では、リンパ腫の浸潤部位に脱髄所見を認め、浸潤部位より遠位部には二次性の軸索変性を認めた。脱髄部位にはマクロファージは認めず、炎症性脱髄疾患 CIDP などとは異なる、マクロファージを介さない脱髄機序が推察された。

本疾患はリンパ腫の浸潤部位に脱髄所見を認めることから CIDP と間違いやすいが、CIDP の診断基準を満たすような脱髄性ニューロパチーであっても、特に痛みを訴える場合や多発単神経炎型を呈する場合は、FDG-PET などによりリンパ腫の存在を検討する必要がある。

本研究の新知見と意義は要約すると以下のとおりである。

1. 本研究の対象 32 例のうち、リンパ腫の節外病変を有する例は 22 例と多く、びまん性大細胞性リンパ腫 (DLBCL) では 14 例を占めた。血管内悪性リンパ腫 (IVL) では多発単神経炎型を呈する軸索変性性ニューロパチーを来すため、節外病変を有する DLBCL では IVL を鑑別する必要がある。本疾患の主体と考えられたリンパ腫の直接浸潤では脱髄所見が特徴であり、IVL との鑑別点と考えられた。
2. 末梢神経障害はリンパ腫全体の約 5% に認めると考えられている。多発単神経炎型を呈するニューロパチー全体からみれば本疾患の頻度は高くないが、軸索変性所見に加え脱髄所見を有する場合などは常に本疾患を念頭に置く必要がある。
3. 慢性炎症性脱髄性多発根ニューロパチーとの鑑別点は、神経症候に部位差、左右差を有する多発単神経炎型を呈し、自発痛を有する例が多いことが挙げられる。電気生理検査では CIDP の診断基準を満たす例が多く注意が必要だが、軸索変性所見と脱髄所見が混在していることが特徴である。
4. 本研究では、化学療法施行中、または施行後 1 ヶ月以内に神経症候が生じた例は含めなかった。化学療法の副作用によるニューロパチーの特徴は、左右対称性の多発単神経炎型で感覚障害が主体の軸索変性性ニューロパチーであり、一方、本疾患では多発単神経炎型と脱髄所見が特徴である。

以上の理由により、本研究は博士 (医学) の学位を授与するに相応しい価値を有するものと評価した。

## 試験の結果の要旨および担当者

報告番号	※甲第	号	氏名	富田 稔
試験担当者	主査	中川 崇也	伴 信太郎	安藤 雄一
	指導教授	斉藤 文江		

## (試験の結果の要旨)

主論文についてその内容を詳細に検討し、次の問題について試験を実施した。

1. リンパ腫の節外病変の有無と、血管内悪性リンパ腫との関連について
2. リンパ腫全体からみたニューロパチーの頻度や多発単神経炎型を呈するニューロパチー全体からみた場合の本疾患の頻度について
3. 慢性炎症性脱髄性多発根ニューロパチーとの鑑別点について
4. 化学療法の副作用によるニューロパチーをどのように除外したかについて

以上の試験の結果、本人は深い学識と判断力ならびに考察力を有するとともに、神経内科学一般における知識も十分具備していることを認め、学位審査委員合議の上、合格と判断した。